

小児科

当院小児科は、新生児から思春期までのお子さまについて、外科系の病気以外の、体や心に関わる全ての変調について御相談に応じます。

午前は、子どもさんの一般的な病気を主に診察します。

午後からは予約で、気管支喘息、食物アレルギー、アトピー性皮膚炎などにつきましては、それぞれのガイドラインを参考にし、食事を含めた生活環境整備への助言など、お子様・保護者さまとの共同作業で、日常生活の質を高めていくよう、お一人お一人にあった治療を組み立てさせていただきます。生活習慣病の予防に、肥満児の

方々が意欲的に減量に取り組むように指導しています。低身長にたいする成長ホルモン療法をすすめています。小児糖尿病の管理もしています。てんかんなど小児神経疾患も見させていただいています。心の悩みについてもご相談に応じます。



～ 患者さんの声 ～

どっこいしょ

これが60代後半からよく聞こえて来る足腰の痛みと付き合っている人の掛け声だ。内臓の病ではこんなのきな声にならず心が痛む、今から45年前頃は主に医者と言えれば内科。現在のようにさまざまな診療科がなかった。今日もまた膝の痛みがどう変わるか、自分で自分の身体の試験だ。ある時は腰を下ろし自分より強い機の脚に自分の足首に腰紐を引っ掛け、身体を上下にスライドさせたり、一升瓶を膝枕にして足を上下にごろごろ揺すっていた。またある時は土手のヨモギ草を乾燥させ、手もみして残る綿状のものを耳かき大に丸めて、痛い皮膚の上にのせマッチで火をつけ神経を刺激する方法。何もかも親からの見よう見まね療法だった。

やがてさまざまな医療機器の開発に伴い、レントゲン撮影など痛い箇所が一目でわかるよう優れものが登場。ついに痛さに耐えきれず、「先生、今日は冷え込むせいで特に足の関節が痛いが何とかならないか」。「こりやお前さん、膝に水が溜まっているよ。

抜けば楽になるからね」。「おねがいします」。こんな先生と患者の会話も微笑ましい。「はい次の方」。今度は若い腰痛の問診を受け、レントゲン撮影にて検査入院及び手術が必要となる。若い者に限り不安感もあるが、痛さが少しでも和らげると思えば手術を逃す訳にはいかない。

「俺も早くもまな板の上の鯉になってしまったか」、しばらくはベッドでうなだれ考え込んだが急に気持ちを新たに、「よし、先生方を神よりも信じよう」。手術の方も予定通り成功の知らせ。「先生、看護師さんありがとう」、2,3日のうちにあの腰痛の苦しさが嘘のように消えた。やがてリハビリが始まり屋上公園散歩の許可も出て、よろめきながらも久しぶりに外風と対面。自分の身体ではない感覚だ。誰でも一度は経験済みだが、まるで仮免許で路上運転に出た気分。長年日常生活で苦しんだ腰痛、あるいは膝関節痛に悩まず、医師に打ち明け早く階段の上り下り、楽になりたいですね。

2009年4月5日

(名古屋市熱田区 K.S)

編集後記

全国的に新型インフルエンザが広がってきました。

感染者が連日のように報告されており、今後、9月下旬から10月にかけてピークを迎えると予測されています。新型インフルエンザの流行を乗り切るために、手洗い・うがいの習慣、マスクの着用、十分な栄養・休養をとって抵抗力を高めるなど日頃から予防に努めましょう。

感染を拡大しないために、一人一人の心がけが大切です。

(H・T)